茨城大学教育実践研究 41(2022),117-128

幼児教育の質向上につながるICTの活用

―― 保育の振り返りに焦点を当てて ――

小野　貴之*・石川　真裕美*・太田　加代*・白井　りえ*・向後　篤子*・神永　直美**

(2022年10月21日受理)

Use of ICT to improve early childhood education quality

―― Focusing on childcare reflection ――

Takayuki ONO, Mayumi ISHIKAWA, Kayo OTA, Rie SHIRAI, Tokuko KOUGO and Naomi KAMINAGA

キーワード:幼児, 保育, 保育の振り返り, ICTの活用

幼児教育において、ICT をどのように活用していくか様々な議論が進んでいる。業務効率化への活用が進む一方で、子どもの遊びや生活をより主体的・対話的にしたり、直接的な体験をより豊かにしたりするツールとして、また保育分析の方法としてのICT活用の可能性を探ることが求められている。本稿では、本園が取り組んでいるICT活用についての研究の一部である教師が行う保育の振り返りへの活用について考察した。研究方法としては、保育動画を元に事例を作成し、カンファレンスを複数回行い、環境の構成や教師の援助について検討した。その結果、ICT の活用により今まで以上に自らの保育を見つめなおすことが可能となり、自身の保育を多様な視点から省察し、子どもの姿の見取りや教師の援助の在り方、環境の構成等を改善することにつながった。今後さらに、幼児教育におけるICTの活用の可能性を探り、実践し、その意義を検討していきたい。

はじめに

本園では、これまで「やりたいがふくらむ保育」という研究テーマの元、保育の基本となる子どもの気持ちや育ちの読み取りや援助を考えることから多様な保育の可能性を探ってきた。その中で、子どもが遊びの中でやりたい気持ちをもち、その気持ちをふくらませていく過程に着目し、子どもにとっての必要性や意味を教師間で検討を重ねたことにより、真に子ども主体の保育とは何かを考え志向することにつながった。また、子どものやりたい気持ちを読み取ろうとすることで、子どもに寄り添う教師の姿勢を改めて問い直す契機となった。どう見取ったか、どう援助したか、どのような素材（教材）を提示し

*茨城大学教育学部附属幼稚園　　**茨城大学教育学部

たかなど、その妥当性を探ることで、援助の適時性や、教材研究・準備、環境の構成の意味を考えることにつながった。それは、子どもの思いと遊びの過程をたどることになり、その後の多様な可能性を予想するという面において、保育の幅を広げることにもなった。

しかし、子どもの「やりたいがふくらむ」という視点（子どもの思いと遊びの過程）を教育課程や指導計画にどう位置づけ、保育の評価に活かしていくかについては課題が残った。本園では毎年、教育課程や指導計画については見直しを行っているものの、日々の保育記録を十分に生かしきれていない状況である。保育記録を分析し有効に活用するために、ICT の活用（web による園務支援システム利用)の可能性を探ることにした。

幼児教育における ICT の活用としては、働き方改革の中での業務効率化への活用や、子どもの遊びや生活をより主体的・対話的にしたり、直接的な体験をより豊かにしたりするツールとしての活用、保育を振り返り分析する方法としての活用などが考えられる。本園では、「保育実践への活用」と「保育マネジメントへの活用」の 2 つの視点から、今求められている幼児教育への ICT の活用について実践を重ねてきた。本稿では、その一部である教師が行う保育の振り返りへの活用について紹介し考察する。

研究目的

近年、ICT 技術は急速に成長し、社会において重要な役割を担っている。こうした社会の変化を受けて文部科学省が「GIGA スクール構想」を推進する等、教育の分野においても重要性が増しているといえる。幼児教育においても、ICT をどのように活用していくか様々な議論が進んでいる。

幼稚園教育要領解説[1]には、「幼児期の教育においては、生活を通して幼児が周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に関わることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという直接的な体験が重要である。そのため、視聴覚教材や、テレビ、コンピュータなどの情報機器を有効に活用するには、その特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的な体験を生かすための工夫をしながら活用していくようにすることが大切である」とある。ICT 機器を活用することで、子どもの直接的な体験をより豊かにすることができる可能性を探り具体化していく必要がある。

また、貞松[2]は「日本のさまざまな業界の中で、とりわけ保育業界では ICT 化の遅れが顕著となっており、そのことが現場の生産性を下げる要因となってきました。その点において、改善の余地が多分にあったと言えます」と述べている。ICT を保育の業務に活用することで、業務の効率化を図ることができると考えられる。

以上のことから、保育現場において ICT を活用していくことは幼児の体験を豊かにすることや、教師の業務の効率化等、様々な可能性があるといえる。その点を踏まえて、本園では教師が保育を振り返る際に保育動画を活用したり、保育の中で子どもと共にタブレット端末を使用したりモニターを子どもたちで見たりするなどの「保育実践への活用」と、保育記録に園務支援システムを導入したり、オンライン会議システムを活用した園内研修を行ったり、保育記録写真を活用して子ども一人一人の育ちを伝える取組を行ったりする「保育マネジメントへの活用」の 2 つの視点から実践、研究を行うこととした。それらはすべて、幼児教育の質向上を志向するものであり、教師が質向上

を目指して実践、研究を重ねる過程こそが幼児教育の質向上なのではないかと考える。

本稿では、本園が取り組んできた ICT 活用についての研究の一部である教師が行う保育の振り返りへの活用について紹介し、検討することを目的とする。教師の振り返りに ICT を活用した理由としては、他の教師の保育を見合うことが難しい現状で、互いの保育を動画により見合うことを可能とすること、教師が映像を何度も見返すことができることから、子どもの動きや表情、発言等から子どもの姿を改めて捉えることができること、動画を元にカンファレンスを重ねることができ、保育を見つめ直す視点を得られることなどからである。

研究の方法

次の手順、方法で研究を進めた。

① 各クラスの研究日に保育の動画を記録し、保育終了後に全教師で視聴し課題を洗い出す。
② 保育を行った教師が、課題を元に事例としてまとめる。
③ 動画や事例を元にカンファレンスを複数回行い、環境の構成や教師の援助について多方面から見直す。
④ 子どもの育ちに応じて、保育の中で直接的な体験を豊かにする ICT の活用について検討しその方法や意味を探る。
⑤ 事例を再度検討し、まとめる。

事例

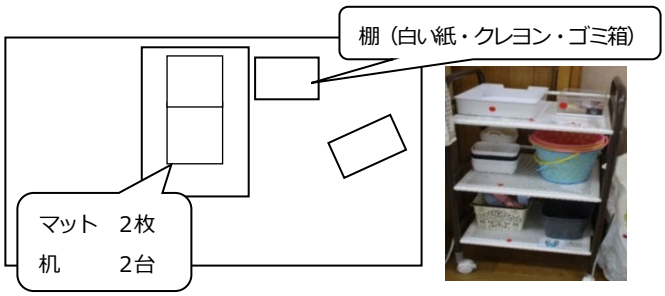
【事例１】子どもたちの育ちに合った環境構成を考える～製作コーナーを通して～　（３歳児）

２学期がスタートし、自分の作りたい物や友だちと同じ物を作ろうとする子どもたちが製作コーナーで遊ぶ姿が増えてきたため、製作コーナーの場を広げること、併せて子どもたちが使える材料を出していくことにした。

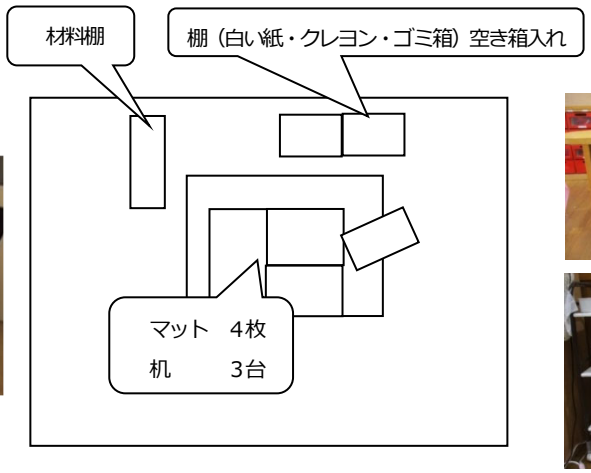
新しくした製作コーナーの大きさや位置、用具や材料は今の子どもたちの育ちに合っているのか。また、どのように活用されているのか。動画を視聴し、子どもたちの様子から環境構成を考えていくことにした。

＜１学期（７月）製作コーナー＞

・自分で好きな絵が描けるよう、白い紙、クレヨンを机の上に用意しておく。（片付けは棚）
・子どもたちの「～が欲しい」という要求に教師がすぐに応えていけるよう、いろいろな材料を準備しておく。
・セロテープ、ハサミは６月頃より、使い方の指導を行ってから置いておくようにする。
（セロテープ…２台くらい・ハサミ…６丁は教師が出す　ゴミ箱…２個）
・子どもたちが少しずつ自分で作れるようになってきた頃から、その都度必要に応じて、材料等を出していく。
（ストロー、折り紙、色画用紙を〇やいろいろな形に切った物、紙テープ、お花紙など）



＜２学期（１１月）製作コーナー＞



・　材料棚・空き箱入れ…子どもたちが自分で使う分を、必要な分だけ取っていくことができるようにする。

［色画用紙・折り紙（4分の１）・色画用紙（１６分の１）・ストロー・紙テープ・ペットボトルのふた・お花紙・白い紙・クレヨン・輪ゴム・ダンボール・カラービニールを小さくきった物など
セロテープ・ゴミ箱　　＊ハサミ（６丁）は教師が出す］

＜場の作り方、広さについて＞

今の時期（11 月）の子どもたちは作ること（表現すること）が楽しく、友達と同じ物を作ろうとしたり、周りの友達の様子を見て興味をもったり、中には自分の居場所として安定の場となっている子の姿もあった。広すぎるのではないか、と感じていたが、十分な広さがあることでそれぞれに自分のやりたい思いを満足させながら、友達との繋がりも感じて遊ぶことができるのだろうと考える。

＜用具や材料の出し方について＞

３歳児の子どもたちにとっての扱いやすい素材、材料、用具等を、育ちを踏まえ一緒に遊びながら見極め準備していったが、まだ上手く使いこなせなかったり、作ることに不安があったりする子も見られた。形にしやすいもの、自分のやりたい気持ちや表現したい気持ちが表せるもの、例えば粘土等も素材の一つとして用意していってはどうか。など素材の選び方を考えていく機会になった。

＜教師の位置について＞

＊　教師が場を離れても、子どもたちは自分たちの場（製作コーナー）で遊びを楽しむ様子が見られた。

製作コーナーで遊ぶ子どもたちの様子を動画で振り返って見てみると、教師の存在を感じながら、見守られているという安心感の中で作ることや表現することを楽しんだり、教師や友達との関わりを楽しんだりしている様子が見られた。製作の場を教師の雰囲気や存在感が残るような場にしていくことで、教師が場を離れても、教師の存在を感じながら安心感の中で遊ぶことができる場、違う遊びに出掛けてもまたその場に戻って来られるような場、自分の居場

所となることのできる場となっていくのであろう。そのため教師は、あまり動き回るのではなく、クラス全体に視線を配りながら、落ち着いた動きや子どもたちに余裕をもってかかわることが必要であり大切なこととなると考える。

＜遊びの振り返りについて＞

作ることに興味をもち、自分の思いを表現している姿（物）を、教師が認めたり、周りの友達に知らせたりする機会をつくっていったことで、子どもたちは、友達の作った物を興味をもって見たり、話しを聞いたりしていた。たとえ上手にできていなくても、自分で作った物が教師や友達に認められることは、大きな自信にそして、思いを形にしたり表現したりしようとする気持ちに繋がっていくと思う。他の子どもたちにとっても友達のことを知るよい機会となることも含め、一人一人の思いを汲みながら３歳児クラスでの振り返りの時間を大切にしていきたいと考える。

＜考察＞

製作の場は今まで、いつも同じ場所に同じように作っていたように思う。今回、動画を見て振り返ったことで、製作の場は“作りたい物を作る場”だけではなく、“色々な意味をもつ場”となっていることが分かった。子どもたちの育ちを見極め、教師の存在も大切な環境であることを意識しながら、常によりよい環境の構成を考えていく必要性を感じた。また、子どもたちが作ることで自分を表現したり、教師や友達との繋がりを感じたりしている姿を見て取ることができた。作ることを十分に楽しみ満足できるような教師の関わりや環境構成も大切であると改めて感じることができた。

【事例２】遊びの続きを意識する環境構成を見直す　（４歳児）

保育後に動画を見てみると、よかれと思って設定しておいた遊びの場で子どもが遊ぶ姿はなかった。今まで教師の準備として当たり前のように行っていた環境構成について、改めて考え見直すきっかけとなった。

＜これまでの室内環境＞

遊びの様子から翌日も続きをするだろうと予想し、教師が同じ場に再現して設定しておく。使った物や、不足していると思われる材料をそれぞれの場に使いやすいように用意しておく。

＜前日の遊びの様子＞

・バーベキューごっこ…やりたい子どもが集まって、作った肉や魚、野菜などを網に乗せて焼いていた。トングで掴むことがしたくて、何度も焼いては友達のお皿に乗せたり、会話を楽しんだりしていた。

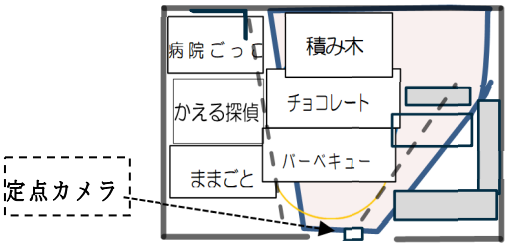
・チョコレート作り…キャップに花紙を詰めてチョコレートにすることが楽しくて、１人でいくつも作っていた。お店にしようと看板を作ったり、「お母さんにあげる」と言ってリュックに入れたりしていた。

５月１３日　　＜環境構成＞

進級、入園した子どもたちが、連休が明けて間もないこの日、前日していた遊びの場が同じようにあることで、安心して遊び始めることができるだろうと思い、いつものように設定しておいた。

バーベキューごっこ…積み木の焼き台、椅子の代わりの積み木２ケ、子どもが作った肉・魚・野菜、トング

チョコレート作り　…前日までに子どもが作ったチョコレート、キャップ、花紙、セロテープ、木枠、椅子２脚



・登園４０分後

全員が登園してからも、バーベキューごっこ、チョコレート作りの場に、子どもが来る様子はない。前日に遊んでいた子どももこの遊びに目を向けることもなく、そばを通り過ぎる。多くの子どもが積み木の場に集まり、教師と一緒に遊んでいる。

・登園１時間後

前日にチョコレートの店の看板を作っていたＹ児が、木枠に飾るリボンを作り始める。教師が他の女児を誘うと３名がリボン作りに興味をもって作り始めた。「どうやるの？」と作り方が分からない様子だったので、教師に一人一人作り方を教えてもらいながら 2、3 個作って木枠にテープで止めると満足したのか他の遊びに離れて行った。

・登園１時間３０分後

前日にブロックで遊んでいた男児が、部屋の隅に置いてあるブロックの入ったカゴをもってきて、部屋の中央で作り始めた。

バーベキューごっこ、チョコレート作りの場には、誰も来ない。

・登園２時間後

積み木で猫の家を作り、中に入って遊ぶ女児２名。そのうちバーベキューの用具類をもってきて、猫のご飯にするなど遊びに利用する。教師はバーベキューごっこの遊びを想定していたが、女児たちは肉や魚を猫のご飯に見立てて遊んでいた。

これまでも自分の保育を動画撮影して見る機会があったが、その際は子どもの遊んでいる様子や発する言葉、教師の声かけを見て聞いて振り返り、省察していた。しかし今回は保育室全体を撮影することで、子どもや教師だけでなく環境についてもクラス全体を俯瞰して見ることができた。そこには教師がいつものように整えておいた遊びの場に誰も来ない様子が映し出されていた。それまでは、子どもがよく遊んでいるから翌日も続きをするだろう、遊んでほしいと思って同じ場を準備していたが、“遊びの場” に対する子どもの思いが膨らんでいることも遊びの続きを意識するには欠かせないことではないだろうか。

＜その後の保育＞

これまでのように教師が前日に翌日の遊びの場を予想して全て整えておくことを思い切って止めてみた。すると、登園してきた子どもたちは、初めはいつものように室内に遊びの場がないことに気付き不思議そうだったが、続きをしようという思いをもっている子どもたちは前日に自分たちで片付けた場を運び出して遊び始めた。遊びへの思いが

継続してない子どもは、前日に遊んでいても、その場に来たり用意したりすることはなかった。

○6 月２２日の保育環境と遊びの様子（ケーキ屋ごっこ）

① 遊びの場は、前日に子どもと一緒に片付けをした状態のままにしておいた。

② 登園してきた子どもたちが、前日に使っていた台やテーブルを同じように部屋中央に運んだり、使う物を持ってきたりして準備を始める。

③ 自分たちでお客さんを呼んでケーキを提供したり、新しいケーキを考えたりと、遊びが広がっていった。

＜考察＞

子どもが主体的に遊びに取り組み「明日も続きをしよう」と意識するようになるには、遊ぶことだけでなくその遊びの場への思いが強くあることが大切であり、教師の意図的配慮が必要であると思った。自分たちで好きな遊びをたっぷりと楽しみながら場を準備したり、片付けたりしながら自分たちの遊びや場への思いが強くなると「もっとやりたい」「明日もやろう」と遊びが継続していくのではないだろうか。教師自身も、もっと子どもの力を信じていいのだと意識の変化を感じることができた。

【事例 3】保育環境、教師の位置について見直す～A 児の姿を通しての振り返りから～　（４歳児）

ビデオカメラで撮影した保育中の動画を見返して、教師の位置や保育環境について見直しを行った。

〈前日のA児の姿〉
「アンパンマンとつみきのおしろ」という紙芝居を読んだことをきっかけに、お城ごっこが始まる。A 児と友達は積み木のお城ができると、ブロックで作ったハンマーを使い、お城を叩いて修理ごっこをする姿が見られた。

４月２２日

登園　１時間３０分後

…子どもの様子　…教師の気付き

A 児は製作コーナーでネックレスを作ると、ネックレスを手にもって保育室内を歩き回っている。その中でもお城ごっこの場所には合計７回訪れている。その間、保育者の方に目線を５回送っている様子が確認できた。お城ごっこに友達が訪れることはなく、一人で飾ってあるブロックの作品に触れたり、ブロックで製作したりしては歩き回る行動を繰り返していた。

教師の周囲には５人の子どもがおり、ネックレスやお弁当を一緒に作りたいと話す。教師は話を聞いたり、製作を手伝ったりことに意識が向いている。それぞれの遊びコーナーが見えない位置におり、背を向けているため A 児の様子にも気付くことができていない。

登園　２時間１０分後

最後にお城ごっこを訪れたときにブロックでハンマーのようなものを作り、お城を優しく叩く様子が見られた。

おままごとコーナーで座り、子どもの話を聞いている時もパーテーションが高いため、保育室全体を見ることができていなかった。

〈考察〉～環境の再構成を通して～

これまで城ごっこで遊んでいた子どもたちは、当日はほとんど城ごっこで遊ぶ姿は見られなかった。しかし、A 児が城ごっこの場所に何度も足を運んでいる姿が映像で見られた。映像では一日の中で何度もそのような様子があり、教師はその姿を把握できていなかった。

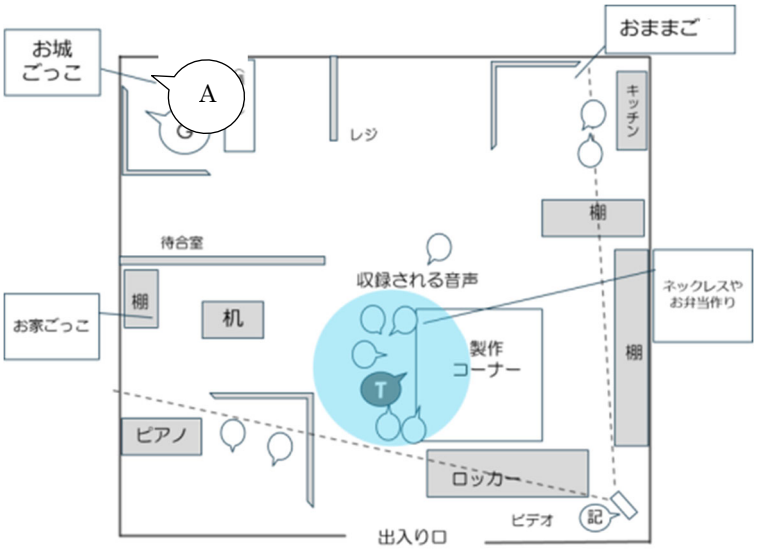
A 児が何度も城ごっこを訪れたり、ブロックでハンマーを作って先日の修理ごっこの続きをしたりして遊んでいる様子が映像を見直して確認できた。A 児は友達と城を作っていく過程に楽しさを感じ、今日も友達と続きがしたいと考えていたのではないだろうか。教師が A 児の行動に気付くことができていれば、A 児の気持ちをその場で受け止め、話し合うことができただろう。目の前の子どもだけでなく、それぞれの遊び場での子どもの様子を把握できるように、環境の再構成や教師の位置を考えていく必要性を感じた。

～保育環境の再構成～

保育者が製作コーナーにいる際に、保育室内にあるそれぞれの遊びのコーナーを見て把握できるように環境を再構成する。パーテーションの高さを測ったところ、90cm だった。子どもが立つと顔が隠れてしまう高さのパーテーションは外し、新たな囲いにする。

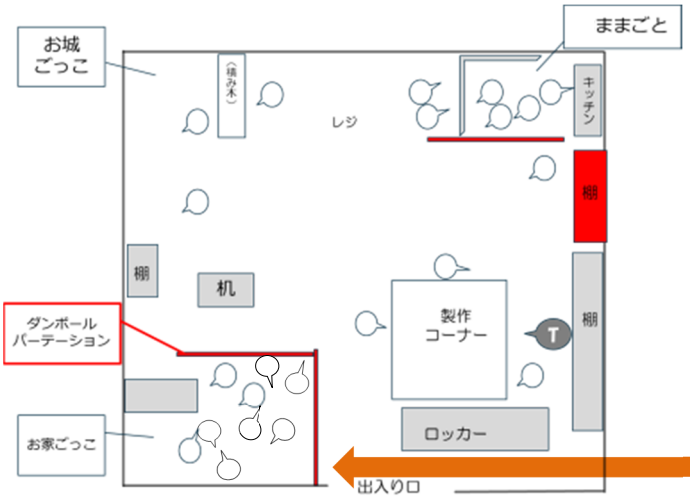
子どもの腰の位置より低い高さの囲いになるように、ダンボールを使って子どもと一緒に作成する。完成した囲いの高さは 30cm だった。そして、子どもが遊びのコーナーを作りやすいようにと設置した棚も 80cm と高さがあったため、壁側に位置を変更する。

また、教師が保育室の全体の様子を把握しやすいように、教師は基本的に製作コーナーの席に座るようにする。



5月7日　１０：３０

保育環境を変えてからは、子どもがそれぞれの遊びのコーナーを見たり、遊びに加わったりする様子が増えた。また子どもが遊びコーナーを行き来することも増え、友達関係の幅を広げていく姿が見られた。特にお店屋さんごっこでは、店員さんとお客さんとしてのやり取りを楽しみ、盛り上がる様子が見られた。



〈考察〉～保育環境の再構成を通して～

４月の中旬は子どもも新たなクラスに慣れておらず、不安な様子の子どもが教師の側からなかなか離れない様子が見られた。教師は不安を抱えている子どもの気持ちに寄り添いたいと考え、側の子どもの話に傾聴していた。しかし、カンファレンスを通して、その行動が他の視線が合わない子どもに不安を与えていたのではないかと思った。

カンファレンス後、保育環境を見直し、再構成してからは子どもと教師の視線が合うことが増えた。視線が合うことで子どもがそれぞれの遊びコーナーで落ち着いて遊びを進めていく姿が多く見られるようになった。その様子から、子どもの遊びが少しずつ自立してきていると感じた。また、これまで見えていなかった子どもの姿が見られるようになり、子どもたちが遊びの中で困っている様子があれば教師がすぐに気付き、声掛けをすることが少しずつできるようになっていった。その後は教師だけでなく、子ども同士の目線もよく合うようになり、互いの遊びコーナーを行き来する様子が多く見られるようになった。

研修や保育環境の再構成によって、子どもや教師の視線を意識することの重要性に改めて気付くことができた。

【事例 4】幼児の内面の見取り方について考える～B 児の姿からの気付きを通して～　(5 歳児)

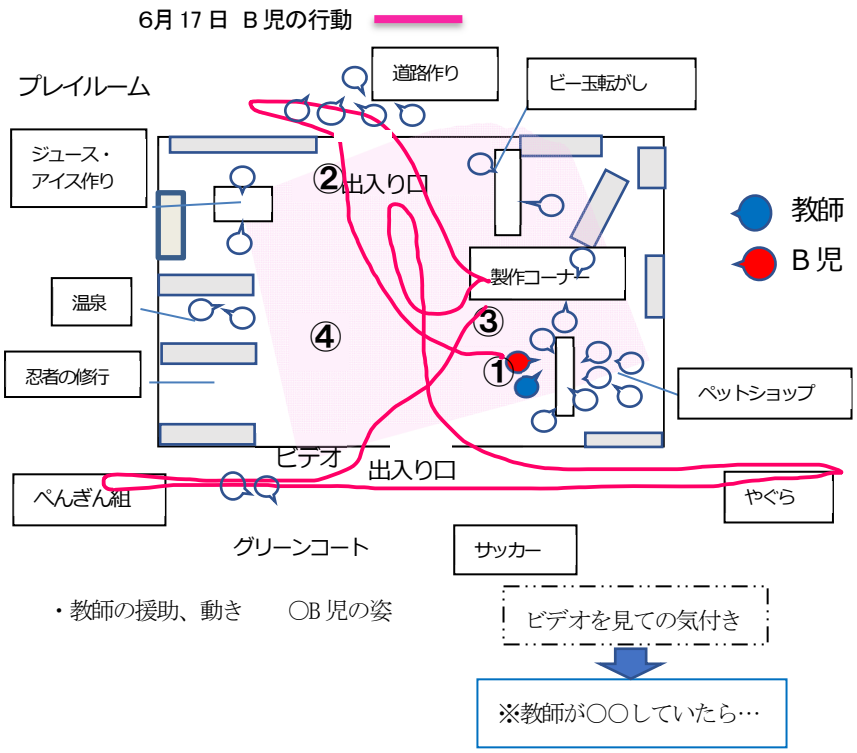
ビデオを視聴し、B 児の行動がとても気になった。登園から２時間ほど遊びが定まらず、いろいろな場所を移動している姿が映し出されていた。また、B 児の姿を通して、教師のかかわりも見てとることができた。B 児と教師がかかわりをもった場面を①～④と表出し、その場面の気付きに対し、教師が〇〇していたらと考察しながら、B 児の内面の見取りについて考えてみた。

<B 児のこれまでの姿>

・気の合う友達と一緒に、活動することが多い。友達とのかかわりながら、ジュースごっこや車作りを楽しむ姿が見られた。アイディアが豊富で自分から遊びを進めていく。

・生活習慣は身に付いており、自分のことは自分でできる。

・「こうしたい」という自分の要求を言葉で伝えることがあまりない。



登園 10 分後 ① (B 児の行動)

・「ペットショップ」に興味をもった子が多く、動物作りを進めたが、今まで遊びに入っていなかった子もいたので、声をかけながら様子を見る。

〇教師の隣にいて友達の様子を見る。いつも一緒に遊ぶA児たちはペットショップで遊んでいるが仲間には入らない。

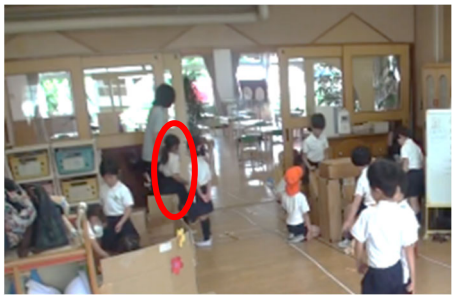
・いつも一緒に遊んでいる C 児たちがペットショップの仲間に入っていた。B 児も一緒に遊びたかったのかもしれない。

※B 児に「ペットショップで一緒に遊ぶ？」と教師が声をかけていたら、気の合う C 児と一緒にアイディアを出し合いながら遊んでいたかもしれない。

〇教師と手をつなぎたがる。手をつなぎ、一緒に行動する。

・B 児と手をつなぎ、友達の車作りを見たり、梅ジュースの様子を観察したりする。

登園 20 分後　②



・教師と一緒に行動しながら、ペットショップの遊びへ誘って欲しかったのか。

※B 児の“教師と手をつなぎたがる”という思いを深く受け止めていたら、H児の思いを聞き出せるような声かけをしていたかもしれない。

登園 1 時間 15 分後　③

・一人でいた B 児に「何して遊びたい？」「キャンディー作りする？」と声をかけ、遊びに誘う。

〇教師の話に耳を傾けるが、「う～ん」と、はっきりした返答はない。

・B 児を遊びに誘ってみたが、製作コーナーで絵描きを始めた。描いた絵をゴミ箱に捨てていたが、やりやい遊びは他にあったのではないか。

〇製作コーナーで絵を描く。その絵を丸めてゴミ箱に捨てる。

※B 児に向き合い、思いをはっきりと聞いていたら、自分のやりたい遊びを話してくれたかもしれない。

登園 2 時間後　④

・振り返りの時間。「ペットショップ」で遊んでいた子たちに、楽しかったことや気付いたことなどを聞く。

〇後方で立っている。

・ペットショップの子たちに反応し、立ったのだろうか。教師は気付けていない。

〇前方に出てくる。

・手を引いて座るよう促す。

〇一番前で「ペットショップ」で遊んでいた友達の話を聞く。

・前方に出てきた B 児に、座るように促したが、ペットショップの遊びに興味をもち、もっとよく話を聞きたいという気持ちの表れではないだろうか。

※いつもと違う B 児の行動に気付き、「どうしたの？」と声をかけていたら、ペットショップに興味があることや、自分も遊びたかったという思いを伝えてくれたかもしれない。

＜考察＞

動画を視聴し、B 児はやりたい遊びが満足にできなかったのではないかと感じた。教師がH児に声をかけられたであろうチャンスのポイントを４つあげてみた。その時に“教師が○○していたら、B 児の活動や気持ちに△△の変化があったのではないか”と考察してみた。

①～③では教師が実際にB児と対話したり、行動を共にしたりしていた。しかし、どの場面でもB児の内面の思いには気付けないでしまった。普段から自分の思いはあまり出さずに、友達の意見を受け入れ、穏やかに生活するB児。だからこそ、対話や表情、行動などに十分注視し、B児の本当の思いを見取る必要があるのではないかと感じた。

動画を視聴したことにより、自分の保育を客観的に見ることができ、自分の保育や子どもたちとのかかわりを改めて考え直すきっかけが掴めた。また、教師全員で視聴し、共通理解を深めたり、他の教師からの意見を受け止めたりすることは、今後の保育や子どもたちの育ちへとつながっていくであろうと思われる。

研究の結果

ICT を活用して教師が保育を振り返った（保育を評価した）事例をあげ、その実際について紹介した。これらの事例を通して、以下のように結果をまとめる。

・自身の保育動画を何度も見返すことで、保育中は気がつかなかった（見えていなかった、聞こえていなかった）子どもの言動に注目することで、子どもの思いに改めて気付くことができた。
・他の教師の保育を視聴することを通して、保育に対する教師の願いやねらい、援助の意図を共有することができた。
・カンファレンスを複数回行うことで、自分の保育への思いを自覚すると共に他の教師の意見を聞き、多角的に保育を振り返ることができた。
・ICT を活用することの可能性を共有し、様々な活用について検討することができた。
・事例にまとめることで省察が深まった。
・カンファレンスから得られた知見から環境構成や援助方法を改善させていくことで、幼児教育の質向上につなげることができた。

本稿では、本園が取り組んでいる ICT 活用について「保育実践への活用」の中の教師が行う保育の振り返りへの活用について事例を紹介し考察した。今後はさらに、業務効率化への活用（「保育マネジメントへの活用」）や、子どもの遊びや生活をより主体的・対話的にしたり、直接的な体験をより豊かにしたりするツールとしての活用などについて実践し意義を検討し、さらなる幼児教育の質向上を目指したいと考える。

引用文献

1)文部科学省.2018.『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）.115 頁.
2)貞松成.2020.『AI 保育革命「福祉×テクノロジー」で人口問題の解決に挑む』(プレジデント社) .72 頁.